

〔研究ノート〕

フリードリッヒ・フォン・ヴィーザーの貨幣と  
価値・価格論をめぐる文庫収録文献

桂 木 健 次

富山大学紀要. 富大経済論集 第59巻第2号抜刷（2013年11月）

富山大学経済学部

[研究ノート]

## フリードリッヒ・フォン・ヴィーザーの貨幣と 価値・価格論をめぐる文庫収録文献

桂木健次

キーワード：ヴィーザー文庫，ワルラス，カール・メンガー，ベーム＝バヴェルク，フリードリッヒ・フォン・ヴィーザー，ドラッカー，自由，価値，価格，貨幣

### 1. 貨幣論とヴィーザー文庫

後年、ヴィーザーからの紹介でオーストリア大蔵省に入省して景気循環対策の実務を経験しているミーゼス並びにハイエクの世代にあっては（1919年蔵相就任のシュンペーターは措いて）、中央銀行制はむしろ解体させるべきであった。この三人を教えたヴィーザー（1917年商務相歴）並びにベーム＝バヴェルク（1900年蔵相歴）においてオーストリア学派としての貨幣論にかかわる価値・価格論は、メンガーの理論と方法論から一步踏み出してその学派としての創設をなしたという Alter による評価も見受けられる<sup>1)</sup>。本文庫収録の上記文献から可能な限り整理しておく。

前稿で少し触れておいたが、メンガーにおいての主観主義的観点からの価値論としての貨幣が如何にして客観的な価値秩序と結びついていくかのミーゼスにおける貨幣の説明は、オーストリア学派の第一世代にあってのヴィーザーが「価値理論を費用現象に適用した価値論」として、並びに「客観的価値としての価格を扱った」ベーム＝バヴェルクに負っているとしたところである<sup>2)</sup>。

Alter が前掲書で「メンガーと、ヴィーザー並びにバヴェルクとの第一世代におけるブレークスルー」として書いているところに目を通してみる。それは、価値、価格、分配並びに資本についての理論並びに方法論に於いてであったとされる<sup>3)</sup>。

それはヴィーザーにおける理論的営為を跡付けることから始められているが、ヴィーザーが寄贈を受けた諸文献を整理分類した文庫における項目建て<sup>4)</sup>がどういう視点と基準でなされたのかを考えて来た私どもにも納得させられるものがある。

### ヴィーザー文庫分類項目別収蔵数

分類項目			文献数	冊数
I	Nationalökonomie	国民経済	64	70
II	Kapital,Zins	資本, 利子	25	25
III	Konsum,Produktion	消費, 生産	20	20
IV	Krisen	恐慌	18	18
V	Lohn,Einkommen	賃金, 所得	26	26
VI	Monographie[über Vertreter der Nationalökonomie]	国民経済学者評伝	52	52
VII	Rente	年金	17	18
VIII	Wert,Preis	価値, 価格	110	114
IX	Bank,Börse	銀行, 証券取引所	91	91
X	Geld,Kredit	貨幣, 信用	198	202
XI	Sparwesen	貯蓄	20	20
XII	Finanzwissenschaft	財政学	190	193
XIII	Gewerbe,Industrie,[Handel]	商工業, 産業	95	98
XIV	Wucher	高利	9	9
XV	Agrarwesen	農業	98	103
XVI	Sozialwissenschaft	社会科学	175	183
XVII	Soziologie	社会学	42	42
XVIII	Armenwesen	貧困者救济制度	25	25
XIX	Bevölkerungswesen	人口	45	46
XX	Frauenfrage	婦人問題	28	28
XXI	Wohnungswesen	住宅	51	53
XXII	Statistik	統計	84	84
XXIII	Politik	政治	71	73
			1,554	1,593

項目 I ~ XII, 0001 ~ 0840 と収蔵文献の半分以上が価値, 価格, 分配並びに資本に関わる分量である。

別の個所で触れているが, メンガーでは彼の *Grundsätze* ではまだ明示的ではなかったが, *Bedürfnisse* (ニーズ) という主観的価値論がヴィーザーやバヴェルクによって明示的に「製品への Wert (価値) としての割り当て」という客観的価値論へと転成したことについての検証がされる必要がある。Alter の言うところでは, 「ある面で, *Bedürfnisse* は urgency (切迫さ) の主観的程度で表現でき, それ故にその数値は *Bedürfnisse* の満足度の個々のレベルに割り当てられる。数値は価値であり, その計算は限界原理による」<sup>5)</sup> と。

応用心理学の一部門としてオーストリア学派の価値論を構築し, 内観したのにはヴィーザーであるが, 彼は同学派が限界価値減少論を経験心理学とすることを正当化することは拒絶した。というのは, 経済原論という価値論がある面で, 心理学という性格をもち, 人間経験一般に基づいているとしても, 経済学に特有の関心対象にならず, 単なる公理であるからである。このように, ヴィーザーがメンガーを受け継いでいるとはいえ, 精神科学 *Geisteswissenschaften* を欠落させたのだが, これはメンガーには特有の範疇であったのだ<sup>6)</sup>。

従って, ヴィーザーのメンガーからの出自をなす *Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft*<sup>7)</sup> が検証されなくてはならない。ヴィーザーの用いる「限界効用」は新たなカテゴリーをもち, 前述のように, ヴィーザーの科学哲学ないしは社会科学はメンガーと違って, 認識論的考察を欠いているが, 誰しものが経験しうる汎通する経済的事象に係っている。そういう意味では。メンガーの「正統」理論枠がヴィーザーにあつての認識論的フレームワークを有するとも云い得るかもしれない。ヴィーザーの根底的な精神科学的アプローチは, 精神科学と自然科学の間の生物学的橋渡しを認識するものではないけれども, メンガーにあった “*Bedürfnisse*” を抜き去っている, と言える<sup>7)</sup>。

ヴィーザーに至って, 議論は欲求充足 *Bedürfnisbefriedigung* の目的論的

過程から、価値理論の問題、すなわちメンガーの純粹理論を機能的に日々の経験的な事象の視野へ再解釈する作業の課題となった。これは、ヴィーザーが純粹經濟理論に一部の数学的解析を取り入れることでなされた、と Alter は指摘している<sup>8)</sup>。

このことは、メンガーの主観的・個人的価値論を、ヴィーザーはワルラスの市場論的個人主義を介して止揚したのではないかというのが、ヴィーザーの方法論的な個人主義に投げかけられる。この方法論に於いて、メンガーのいう個人に代わって、十分に発展した社会の一人前の構成員は經濟的価値の議論に於いては孤立独立した個人であるとされる。メンガーを扱うヴィーザーのステップを追うと、彼の義弟バヴェルクとの1876年にクニース Knies, Karl のセミナーでおこなったレポートに遡れるが、*Über den Ursprung und die Hauptgesetze des wirtschaftlichen Werth*, 1884 でまとまった知見が出されていると Alter は指摘する。

すなわち、この稿で初めてカテゴリーの限界効用 *Grenznutzen* がジュボンズ William Stanley Jevons に沿って「最後にして現代的効用」の意での「限界効用」(メンガー)から「限界価値」の意に替えられ、欲求 *Bedürfnisse* は利(益) *Interesse* へとって替えられているということである<sup>9)</sup>。このことで何が展開されたかという、価値と価格は区別され、価格が「価値が扱う財の限界効用に加えて貨幣の限界効用を反映する」こととして扱われるようになったのである<sup>10)</sup>。前稿で私が指摘しておいた交換価値の主観的価値と客観的価値の区分についていうと、客観的交換価値というのは価格すなわち貨幣現象にかかわって定義されることになる。

ヴィーザーは言う、「メンガーの価値理論はほかの人と違っている。彼は、均衡の法則と限界法則を価格についてだけでなく価値についても指摘している。私の見方では、この点でメンガーはほかの説より優っていて、かつ価値論の完全な基礎を築き上げた人間としての榮譽を勝ち得た。ほかの人は、欲求の法則と価格の法則にその研究を止めた。しかし彼だけが価値の法則をも研究し

ている。彼の見地は極めて広く、単に今日の経済についての完全な理解を与えるのみでなく、その上にまた将来あるいは実現すべき経済全体を熟考する可能性を与える。」別の箇所では、「多くの研究者は、現在と将来との動き *Regung* の差から資本利子 *Capitalzins* を説明しようとする。私はこれは間違っていると考える。生産的資本利子というのは、もっともよく将来を考慮してマネジメントされた経済的運用の表象そのものだからである。」と指摘している<sup>11)</sup>。

ヴィーザーがこう至るのは、効用 *Nutz* があらゆる経済の最高原則であったとしても、「効用の計算形式」として、「ひとは効用を計算することはなく、価値を以てなす」として、価値が経済生活を支配する手段となったとき、「価値循環」としての流通 *Verkehr* という市場における価格現象としての経済を解明することを、彼がなしえたがためであった<sup>12)</sup>。

ヴィーザー文庫に残されている諸文献のうち、II. *Kapital, Zins* の以下の25点に注目したい。

No.0065 Adler, Karl. *Kapitalzins und Preisbewegung*. München, 1913.

No.0066 Böhm von Bawerk, Eugen Ritter. Eine "dynamische" Theorie des Kapitalzinses; Schlussbemerkungen. *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*. Wien, 1913.

No.0067 Böhm-Bawerk, Eugen von. Gegenbemerkungen zu Prof. Clark's Replik betreffend "Das Wesen des Kapitaless". *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*, Bd.16. Wien, 1907.

No.0068 Aulnis de Bourouill, Johan, baron d'. Der Zinsfuß. Die Ursachen seines Sinkens und seine nächste Zukunft. *Jahrbüchern für Nationalökonomie und Statistik*, N.F. Bd.18. Jena, 1890.

No.0069 Aulnis de Bourouill, Johan, baron d'. Der Zinsfuß im Jahre 1889. *Jahrbüchern für Nationalökonomie und Statistik*, N.F. Bd.20. Jena, 1890.

No.0070 Clark, John Bates. Capital and Its Earnings. *Publications of the*

- American Economic Association*, Vol.3, No.2. [Baltimore], 1888.
- No.0071 Clark, John Bates. The genesis of capital. *Yale Review for November*. 1893.
- No.0072 Engländer, Oskar. Zur Theorie des Produktivkapitalzinsens. Halle, 1908.
- No.0073 Fisher, Irving. Precedents for Defining Capital. *Quatery Journal of Economics*, Vol.18. Boston, 1904.
- No.0074 Frölich, Gustav. Über das sogenannte umlaufende Betriebskapital: Ein Beitrag zur Wirtschaftslehre des Landbaues. Merseburg, 1904.
- No.0075 Giddings, Franklin Henry. The Theory of Capital. *Quatery Journal of Economics*. Boston, 1890.
- No.0076 Henry, Jean. Considérations sur l'intérêt de l'argent. 1872.
- No.0077 Jacoby, Walther. Kritik der Carl Mengerschen Kapitalstheorie. Jena, 1908.
- No.0078 Schade, Emil. Böhm-Bawerks Zinstheorie und seine Stellung zur Produktivitätstheorie. München, 1905.
- No.0079 Schaposchnicoff, N. Die Böhm-Bawerksche Kapitalzinstheorie. *Jahrbuchern für Nationalökonomie und Statistik*, Dritte forge, Bd.33 (88). Wien, [1907].
- No.0080 Schumpeter, Josef. Eine "dynamische" Theorie des Kapitalzinsens, *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*. Wien, 1913.
- No.0081 Spiethoff, Arthur. Kapital, Geld und Güterwelt in ihrem Verhältnis zu einander: drei Aufsätze aus Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft, 1909. Berlin, 1909.
- No.0082 Strigl, Richard. Der Kapitalzins als Residual-Rente. *Archiv für sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.47, Heft 3. Tübingen, 1921.

No.0083 Tirazian, Artasches. Zur Kritik der Böhm-Bawerk'schen Kapitaltheorie. Innsbruck, 1920.

No.0084 Vesanis, Sotirios. Ueber das Verhältnis der Vermehrung der Zinskapitalinhaber und der Zinskapitalien. Berlin, 1895.

No.0085 Voigt, Andreas. Probleme der Zinstheorie. *Zeitschrift für Sozialwissenschaft*, Neue Forge Jg.9. Leipzig, [1908]

No.0086 Voyer, Ernst. Ueber die Höhe der verschiedenen Zinsarten und ihre wechselseitige Abhängigkeit. Die Entwicklung des Zinsfußes in Preussen von 1807 bis 1900. Halle, 1902.

No.0087 Weiss, Franz X. Eine Residualtheorie des Kapitalzinses. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.49, Heft 1. Tübingen, 1922.

No.0088 Weiß, Franz X. Professor Diehls Kritik der Kapitalzinstheorie von Böhm-Bawerk. *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*, Bd.25. Wien, 1916.

No.0089 Zehentbauer, Franz. Das Zinsproblem nach Moral und Recht: geschichtlich behandelt unter besonderer Rücksicht auf c. 1543, Cod. iur. can. Wien, 1920.

ヴィーザーは、第2章 流通価値と自然価値の価格の節で、価格は「限界購買者の貨幣等価物」によって決定されるとしたバヴェルクの「流通価値」*Verkehrwerth* 論に言及している<sup>13)</sup>。

そのバヴェルクのほうはどうだったのかについては、Alter が以下を指摘している。

それによると、メンガーとバヴェルクとの間には、ヴィーザーとの間ほどの開きはなく、介在するワルラスとは近似である。理論は必ずしも経験則的・歴史的である必要はなく、純粹論（原理論）に数式的であることは方法論としても認識論としても不要であるとした<sup>14)</sup>。



## 2. 限界効用理論を確立したヴィーザーがゴッセン並びにジュボンスに係る文献

なお、このところについて八木紀一郎に新たに考察があり、メンガーが *Grundsätze* (1971) ではロッシャー Wilhelm Georg Friedrich Roscher に協力したとしても、それは財と価値に係る経済学基礎概念 “exact science” の「孤立的 isolated 人間」の定立に係ってであって、歴史主義という枠には無関係だとし、ロッシャーの *Grundlagen*<sup>15)</sup> はメンガーが彼のそれを仕上げるに先立って学んだキーワードの一つに過ぎない、とのロウ Karl Heinrich Rau の *Grundsätze* 解釈に沿いながら、一橋大学メンガー文庫が収蔵する版に依拠してメンガーのシュモラー Schmoller, Gustav への「批判」的コメントを看過さなかった<sup>16)</sup>。

八木は、ハック Hack, F. の, *Carl Menger* (1872)<sup>17)</sup> を取り上げて、メンガーが問題を自然科学的な「人間行動の要因と結果」でなく目的論的に充足と必要に向けて関わっている人間の事象をとらえた、としたからである<sup>18)</sup>。

ワルラスの市場論的個人主義を介してメンガーのステップを追うヴィーザーへの Alter の考究によって掴まれたことは、八木の視座にはいってないが、メンガー *Grundsätze* (1871) の方法論的ウイークポイントが経済活動における real と “理想型 ideal type” の区別の不十分さとして経済理論に紛れ込んでいたという指摘はなされており、それ故に一橋版が解き明かす意義の指摘がなされている<sup>19)</sup>。

八木考察を Alter のそれと照合させてみた。Alter はメンガーの場合には、一財が様々な欲求 Bedürfnisse を充足するものとして、一つの欲求はいくつかの物理的に異種の財によってはじめて充足されるものとして、欲求選好の複合体と財の分量とが向き合っていると特徴づけることでメンガーの主観的価値論を措定する。それが成り立つには、消費者における欲求への財の関わりの認識 technology matrix がなければならない<sup>20)</sup>。

この Alter の指摘は、八木が一橋版で出した「メンガーの経済主体に指定する人間の合理性は、シュモラー命題から距離を置いているのだろうか」ということに係って考察している以下の2点にどう重なり合うのか。その2点とは、

・「財のニーズ Need」における取得しうる財の量にかかわる「決定 disjunctive」

1871年版や posthumous 版では「原因と結果」のフレームワークにあり、人間の意志は経済現象の規定的なものとされていたが、1923年版では先に指摘のような目的論的变化がある。

・経済行動の proper な目的として、財の技術的・心理的定義とはちがった経済活動の期待 *Erwerbgs Gelegenheit* の導入。

これはバーム＝バヴェルク *Geschite und Kritik der Kapitalzinstheorien*, 1984におけるメンガーの資本利子（資本商品の価値）論批判もあって、バヴェルクが資本の現在価値は将来所得フローの割引としたのだが、不均衡と不安定性に関心をおくメンガーにあっては「期待」が果たすのは客観的とはみなし得なかった、と<sup>21)</sup>。

ここでハイエクの次の指摘を考慮しておかなくてはならない。「人間の欲求 Needs とその充足のための手段の間の因果的關係の注意深い開発的検証が（メンガーの1871年の書で）その初めの数ページのなかで、第一、第二、第三、さらにそれ以後のオーダーの間の財を今までは周知のあの区別立てへと導き、異なった財の間の類似の相補的定理については、ヴィーザーの最期の価値論に関する書 *The Theory of Social Economy*, 1914で論じられた“vorwertttheoretischer Teil”に先立って体系的に表現されているオーストリア学派の技術的構造として特に注目できる。<sup>22)</sup>」

ここでハイエクはメンガーの先行を認めながらも、先に挙げた「限界効用」として用語法的には「われわれの欲求の充足のために我々が認識するところから具体的な財若しくは財の数量として受け取る重要度、取得し得る財数量のシ

ングル単位で体得される最後の充足」として説明できたのはヴィーザーであると指摘する。こうした認識は概念的にメンガーが整理していたが、彼に先行(同時代的になされた)する研究が Hermann, F.B.W. von, *Staatwirtschaftliche Unterschassuchungen, Munchen, 1874* で、「不十分数量 das ökonomische Mengerverhältnis」として使われていたと指摘している<sup>23)</sup>。

ハイエクは、ヴィーザーがメンガーの初見とした、のちに「欲求充足に関するゴッセンの法則」とされたその際の増大する充足にともなって個人の欲求の強度の減退についての心理学的事実については、価値を測定可能とする「ほかの同価値の財で表象できる一財」(貨幣)に言及するにいたっていると指摘しているが<sup>24)</sup>、そのあたりについての事情を解明できる史料として当ヴィーザー文庫には以下の2点がある。

No.0168 Walras, Léon. Un économiste inconnu, Hermann-Henri Gossen. *Journal des Economistes*. 1885.

No.0307 Roesler, Hermann. Zur Theorie des Werthes. *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*. Elfter Band. Jena, 1868.

ヴィーザーが後日退けた「無限級数的財行列の最終財の効用の問題」としてメンガーが述べていたかは別に、ハイエクが脚注<sup>25)</sup>で触れているのだが、バーム＝バヴェルクの資本蓄積過程に伴う将来欲求への過小評価を行ったとしたメンガーのコメントを合わせ見ると、生産費用が個々の財の相対価値を決定するかどうかは明示的には説明をなされていない<sup>26)</sup>。

なお、ワルラスは上記収蔵文献 No.0168 にゴッセン Gossen, Hermann の業績について記述しているが、その文献が当文庫に所在している意義は、限界効用理論を確立したヴィーザーがゴッセン並びにジュボンス評価を行ったもっとも手許となったものであるからである。また、文庫にはジュボンスに係る文献としてはほかに以下がある。

No.0160 Böhmert, Wilhelm. W. Stanley Jevons und seine Bedeutung für

die theoretische Nationalökonomie in England. Altenburg, 1891.

ワルラスは文献 No.0168 をヴィーザーに寄贈する際に、その最後のページの一節を消して子細に追加書き込みを残している<sup>27)</sup>。それは、*Études d'économie sociale : théorie de la répartition de la richesse sociale*, Paris : *Économica*, (c1990) 2ed.1936, pp. 311–330 脚注にある修正履歴と照合でき、このワルラス *Un économiste Inconnu. Hermann-Henri Gossen. 1885* がメンガーほかに謹呈されている証左は出てないが、同版が存在している *The Goldsmiths' Library of Economic Literature*, Senate House Library, University of London の OPAC 検索から、  
[http://catalogue.ulrsls.lon.ac.uk/record=b1452261~S24\\*eng](http://catalogue.ulrsls.lon.ac.uk/record=b1452261~S24*eng) の  
newcatalogue: [http://encore.ulrsls.lon.ac.uk/iii/encore/record/C\\_\\_Rb1452261](http://encore.ulrsls.lon.ac.uk/iii/encore/record/C__Rb1452261)  
には "Note Excerpt review article. With manuscript additions by the author."  
の所在が分かった<sup>28)</sup>。

ワルラスには、御崎佳代子が遡及したように、社会の進歩に伴い増大する地代を国庫収入とする父オーギュスト譲りの「土地国有」論がある<sup>29)</sup>。これを論証する件が重版で出されているのだが、その初刊抜刷に、希少性をめぐり本文献に加筆されてヴィーザーに謹呈されたということである。レオンは、土地、労働、資本という生産寄与の尺度に応じて収益を帰属させるに際して、土地については国有化した土地を資本用益に貸出して上がる地代を以て国家歳入とすることで無税とし、労働については御崎が紹介したように人民アソシアシオン割引金庫の設営<sup>30)</sup>による「労働者が貯蓄によって資本の所有」に係ることで、資本のリスク（貸付利子の上昇）を抑えることを社会実験している<sup>31)</sup>。

ヴィーザーの *Der Natürliche Werth*, Frankfurt a. M.: Sauer & Auvermann, 1968 は、3 章生産収益の自然的帰属の 24（寄与と協働）と 25（帰属の経済上

の働き)において、メンガーにコメントしながら、自分たち(バーム=バヴェルクとの)の見地を以下のようにまとめて整理している。それによると、メンガーが資本、労働及び土地の生産要素に振り当てた収益の持分は「その協働に依存する」とされたが、彼は「所有者がこう考える経済過程」への「生産的寄与」として「それぞれの寄与の尺度に従い収益を帰属させる」<sup>32)</sup>。

この論点は、寄贈されたバヴェルクからの書(一橋大学収蔵)へのメンガーの書き込みからも窺われる<sup>33)</sup>。

なお、ヴィーザー文庫にもバーム=バヴェルクから献本された以下の文献が収蔵されているがヴィーザーからのコメントは見当たらない。

No.0004 Macht oder ökonomisches Gesetz? / von Eugen von Böhm-Bawerk

No.0066 Eine "dynamische" Theorie des Kapitalzinses / von Eugen von Böhm-Bawerk

No.0067 Gegenbemerkungen zu Prof. Clark's Republik Betreffend "Das Wesen des Kapitals"/ von Eugen von Böhm-Bawerk

No.0159 The Austrian economists."Dr. E.v. Böhm-Bawerk, translated by Henrietta Leonard"/ von Eugen von Böhm-Bawerk 一橋古典メンガー文庫と併設収蔵

No.0230 Zur neuesten Literatur über den Wert. / von Eugen von Böhm-Bawerk 一橋古典メンガー文庫と併設収蔵

### 3. ドラッカー・サロンとシュンペーター

前稿<sup>34)</sup>でのオーストリア学派の展開に占めるシュンペーターについては、彼の初期の記述に留めておいた。ここでは、ドラッカー Drucker, Peter F. の *The Ecological Vision: Reflectious on the American Condition*, Transaction

Publishers, 1993 (邦訳:上田惇生ほか『すでに起こった未来』ダイヤモンド社, 1994) に基づいて若干の考察を加えておく。

ドラッカーは書いている。「シュンペーター自身は、ウィーンが経済理論の中心だったころ、オーストリア学派経済学の偉大な先人たちの教えを受けた。彼は、その師たちに終生変わらない愛情を抱いていた。しかし、彼の偉大な著作群の第1作 1912年、28歳のときにドイツ語で刊行された『経済発展の理論』<sup>35)</sup> にやがて発展することになった博士論文は、経済学を中心問題が均衡ではなく、構造変化であるという主張から出発していた。そこから、革新者を経済学の真の主役とするシュンペーターの有名な理論が生まれたのである。」<sup>36)</sup>

ドラッカーが成育期にシュンペーターたちのオーストリア学派と知古を得たことは、彼の以下の4点からわかる。

・ *Adventures of a bystander*, New York, 1979 『傍観者の時代: わが20世紀の光と影』 風間禎三郎訳ダイヤモンド社, 1979

・ *Adventures of a bystander, /with a new introduction by the author*, New Brunswick, N.J., U.S. A., 1994. 『ドラッカーわが軌跡 知の巨人秘められた交流』 上田惇生訳, ダイヤモンド社, 2006,

・ *Ibid.*, 『ドラッカー名著集 12 傍観者の時代: 12 (ドラッカー名著集 12)』 上田 惇生 (翻訳), Amazon Kindle

・ 『ドラッカー 20世紀を生きて 私の履歴書』 牧野洋訳・解説, 日本経済新聞社, 2005

前3点は、*Adventures of A Bystander* 1974とその新版(1994)の訳、4点目は日本経済新聞連載記事に訳者(インタヴューア)の解説付きで、彼が両親の主催するサロン(並びにそれに繋がる ヘルマン・シュワルツワルト夫人 オイゲニア Genia が主催したサロン)の様子が語られている。その社交範囲は広く、16才の頃にはノーベル文化賞を受賞しているトーマス・マンにも出逢っていた。父のヘルマン(ヘム)は、オーストリア領ポーランドの東端、

ロシア国境近くの出身。チェルノヴィツ大学卒業後、貿易省に就職。35才で高等官になり大蔵省財務担当、国債の発行によって財政難を切り抜けた第一次大戦中は外国貿易省長官。オーストリア・フリーメーソン団の団長とも言われていて、後日の敗戦後退任し倒産したアングロ・オーストリア銀行の会長として同じく大蔵大臣を退いていたシュンペーターとともに再建に当たったが失敗し引退している。そのドラッカー家では、月曜日は父の主催で「政治の夜」で政治家・学者・銀行家が参加、水曜日は女医であった母の主催で「医学・精神分析の夜」、金曜日は無制限で友人宅と交互に開催。その一つにオイゲーニアのサロンがあった。なお、彼女はオーストリア領ポーランドのロシア国境近くの出身でチューリッヒ大学に進学しドイツ文学の博士号を持つ資産家。女性の大学進学が阻まれていたウィーンに大学入試に必要な科目を教える女性のためのギムナジウムを設立。ドラッカーの父はウィーン大学で経済学の教授のときにそのギムナジウムでも教えていて、母はその第1期生にあたる。ドラッカー家のサロンの常連として名前を並べていたのが、シュンペーター、ハイエクで、後日チェコ大統領になっているトマーシュ・マサリク Tomáš Masaryk もいた。サロンを支えていたドラッカーの母と同期のアネッテ Annette はオーストリアで経済学を専攻した初の女性となった。ヴィーザー、バーム＝バヴェルク、フィリップヴィッチ Eugen Philipovich などが教壇に立っていた1906年頃のこと、ミーゼスはアネッテの同級だった。ドラッカーはヴィーザーの没年1926年の翌年に17歳でウィーンを離れている。父親と交流があった人、サロンの参加者として、ヴィーザーの名は見あたらないが、ヴィーザー文庫には、女性問題についての文献が以下の28点あり、アネッテとの師弟関係の可能性、ゲーニアのサロンに大学教授が参加していたという記述からもヴィーザー参加の可能性はあるが検証はできていない<sup>37)</sup>。

No.1321 Arlt, Ilse von. Die gewerbliche nachtarbeit der frauen in Österreich. Bericht erstattet der Internationalen vereinigung für gesetzlichen arbeiterschutz. Wien, 1902

- No.1322 Braun, Franz. "Die Frau im Staatsdienst" dargestellt an den Verhältnissen bei der Reichs-Post und Telegraphenverwaltung. Berlin, 1912.
- No.1323 Büchner, Louise. Die Frauen und ihr Beruf. Leipzig: Th. Thomas, 1884.
- No.1324 Bumm, Ernst. Über der Frauenstudium: Rede zur Gedächtnisfeier des Stifters der Berliner Universität König Friedrich Wilhelms III in der Aula am 3. August 1917. Berlin, 1917.
- No.1325 Diers, Marie. Die deutsche Frauenfrage in ihrem Zusammenhang mit Geschichte, Volkswirtschaft und Politik. Potsdam, [1920].
- No.1326 Fischer-Eckert, Li. Die wirtschaftliche und soziale Lage der Frauen in dem modernen Industrieort Hamborn im Rheinland. Hagen in Westf., 1913.
- No.1327 Hartwig, Julius. Die Frauenfrage im Mittelalter: Vortrag, geh. am 27. März 1906. Lübeck, 1906.
- No.1328 Hermann, Judith. Die deutsche Frau in akademischen Berufen. Leipzig, 1915.
- No.1329 Ichenhaeuser, Eliza. Frauenziele: Aufgaben der Frauenbewegung. Berlin, [1912].
- No.1330 Key, Ellen. Missbrauchte Frauenkraft. Berlin, 1911.
- No.1331 Leidesdorf, Maximilian. Die Frauenfrage und deren Lösung. Wien, 1882.
- No.1332 Lemp, Eleonore. Frauenberufe Vorbildung, Ausbildung, Anstellung nebst Ratschlägen für Bewerbungen. Halle, 1911.
- No.1333 Mounier, Guillaume Jacques Daniel. Het beginsel van politietoezicht op de prostitutie, getoetst aan moraal, recht en hygiëne: beschouwing naar aanleiding van het strafproces in de zaak van



- Neeltje F. ... voor den Hoogen Raad der Nederlanden. 's-Gravenhage, 1885.
- No.1334 Müller, Karl. Die Frauenarbeit in der Landwirtschaft. Jena, 1913.
- No.1335 Nielsen, Lilly. Die verdrängung von männerarbeit durch frauenarbeit in der industrie. Düsseldorf, 1919.
- No.1336 Pierstorff, Julius. Über die Frauenfrage. *Jahrbuch Für Nationalökonomie Und Statistik*. NF 7. Jena, 1883.
- No.1337 Queck, Johannes. Die frauenarbeit in der spinnereindustrie Sachsens. Leipzig, 1915.
- No.1338 Rauchberg, Heinrich. Miscellen. Die Erhebung über Frauen- und Kinderarbeit in den Vereinigten Staaten. *Archiv für soziale Gesetzenburg und Statistik*. Berlin.
- No.1339 Reimann, Erna. Die Frau als kaufmännische Angestellte im Handelsgewerbe. Berlin, 1915.
- No.1340 Reinhäckel, Robert Paul. Madame de Charrière und ihre Stellung zur Frage der sozialen Lage der Frau. Weida, 1906.
- No.1341 Reinsch, Gustav. Stellung und Leben der deutschen Frau im Mittelalter: Vortrag, gehalten im Wissenschaftlichen Verein zu Nordhausen. Berlin, 1882.
- No.1342 Schmitz, Agnes. Ueber die Lage der weiblichen Handlungsgehilfen und die Entwicklung ihrer Organisationen. Krefeld, 1915.
- No.1343 Schultze, Fritz. Der Dresdner Rechtsschutzverein für Frauen und meine öffentlichen Vorträge über das Seelenleben des Weibes: eine Entgegnung. Der Dresdner Rechtsschutzverein Für Frauen Und Meine Öffentlichen Vorträge Über Das Seelenleben Des Weibes. Dresden, 1896.

No.1344 Sittel, Valentin. Die Frauenarbeit im Handelsgewerbe. Leipzig, 1911.

No.1345 Stammler. Ueber die Stellung der Frauen im alten deutschen Recht. Berlin, 1877.

No.1346 Süersen, Elisabeth. Die Frau im Gewerbeaufsichtsdienst der deutschen Einzelstaaten. München, 1918.

No.1347 Ungar, Heda. Die Frauen-Heimarbeit in Cöln. Bonn, 1915.

No.1348 Wagner, Oskar. Die Frau im Dienste der Reichs-Post- und Telegraphenverwaltung. Halle, 1913.

ドラッカーがシュンペーターを通してオーストリア学派から受け継いでいる論旨は2つある。

ひとつは、資本の収益が「雇用を維持創出する唯一手段」である故にもつ「倫理性」若しくは「道徳性」という指摘<sup>38)</sup>。

すなわち、古典派を悩ませマルクスほかの社会主義者を輩出させることになる「経済を動かすために資本家 (Unternehmer, entrepreneur) に渡すべき利益と言う名の賄賂、何らかの機能をもたない剰余という賄賂を最小限にするためには、いかなる経済を構築すべきかという問題」で、「急速な技術の変化と雇用を可能とするために、いかにして資本形成と生産性を維持していくか」その「未来のコストを賄うために必要な利益」のコンセプトである<sup>39)</sup>。

これに派生してのもうひとつは、これからの時代における経済理論や経済政策の中心的問題が「財やサービスではなく貨幣や信用」に移るとした指摘で、シュンペーターが敗戦間もなくのオーストリア時代にはそのことを論じている、とドラッカーはいう<sup>40)</sup>。確かに、本文庫収蔵の以下に於いて確認できる。

No.0048 Die Wellenbewegung des Wirtschaftslebens, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.39, Heft1, Tübingen, 1914. 併設: 一橋古典 Mengar.

No.0706 Grundlinien der Finanzpolitik für jetzt und die nächsten drei Jahre, Wien, 1919.

この件は、前稿2) 252頁でも触れている。ドラッカーがケインズ学派を批判している箇所を少し追ってみよう。「貨幣を経済の要因と位置付けるならば、自動的かつ誤りのない調整は原則ではなく、例外となる。信用経済に於いては、価格と賃金が急速かつ自律的に調整されることはないということになる。それらは、きわめて硬直ならざるをえなくなる。なぜなら、コストの大きな部分は、実にそのほとんどの部分が過去の貨幣上の債務だからである。現在の財やサービスは、過去の価格と賃金において、過去に生産されたものである。したがってこの債務は、現在の貨幣の価値の変化から影響を受けない<sup>41)</sup>」

#### 4. ほかの争点

環境経済学を永年テーマにしてきた私が気にしていたメンガーの以下の論点を国家の権能に関わらせて池田幸弘が取り上げたので少し言及する。

それは、チロル(“Tyrol, Istria, Dalmatia”)における個人主義的森林伐採の災害への政府ファクターによる干渉を主張した件を取り上げた初期メンガーの *Rudolf Lectures* を扱った Barnett, M. *The Papers of Carl Menger in the Special Collection Department, William R. Perkins Library, Duke Univ. in B. Caldwell ed., 1990* を紹介した Strissler (1994) からの孫引きであるが、当時のメンガーが依拠した Rau, Heinrich 並びに Roscher, Wilhelm の *Cameralwissenschaften* に関してである<sup>42)</sup>。

これは、前稿でシュパンとのかかわりに関して扱ったところの「普遍主義」を具現する国家の権能とも関連してくる<sup>43)</sup>。この件を池田がメンガーのウィーン大学における *Lectures on Finanzwissenschaft* を取り上げて検討している<sup>44)</sup>。

すなわち、国家の歳入歳出という権能は「モラルという目的関数なのだ」ということで、国家をこうした倫理的的存在とする考えは、イギリスの古典経済学

には見出できない。これはメンガーが社会政策学会のメンバーと分かち合った視座で、Kapital, Untetnehmungsggeist, individuelle Intitiative,そして Selbstverantwortlichkeit と言ったボキャブラリイと一緒にドイツの普遍主義なのだという結論を池田は引出している<sup>45)</sup>。

このことを考えるにあたって、一つは、文庫のなかにドイツ普遍主義とは対照的な No.1241 Rousseau, J. J. *Der Gesellschaftsvertrag*. 4 Aufl, 1862, Leipzig, Soziologie が所在することに注目したい。ルソー Rousseau, Jean-Jacques の *Du Contrat Social ou Principes du droit politique*, 1762, Amsterdam のドイツ語版であるが、ドイツでこの社会契約論が刊行されたのは、いま確認できる限り、*Der Grundsätze des Staatsrechtes, von Jean Jacques Rousseau ; in der verbesserten Übersetzung von H. Denhardt ; mit einem Nachwort hrsgegeben von Heinrich Weinstock* (Universal-Bibliothek, nr. 1769 (2)): 東大法学部 (pbk J022:R864:D62G4101570505) で、No.1241 はこの4版であるようだ。

これは、開封されないままにヴィーザーが読んだ形跡は実証されていない。同版が定塚山図書館（本館）(K089//R1//304 1100007322) に収蔵されている。

オーストリア学派がルソーからどこまで影響を受けていたかは定かでない。ヒットラーがウィーンを抑える前後に、ミーゼスたちの多くの知識人が出ていくか追われたのだが、オーストリア学派とは直接のつながりがなくても、第2次世界大戦が終わってベニントン・カレッジ（バーモント州）で *Escape from Freedom*, 1941 (『自由からの逃走』日高六郎訳, 1951, 東京創元社) を著わした精神分析学者エーリッヒ・フロム Fromm, Erich Seligmann が同僚としたひとたちにドラッカーやカール・ポランニー Karl Polanyi 達がいた。フロムは、自由に耐えられなくなって新しい束縛に自分から服従していく人々の心理をドイツのナチズムの経験に照らして考え分析をしたひとだが<sup>46)</sup>、その「自由」とは、「普段の生活」の中で元々自分に備わっている「道徳的自由」を得られるとしたカント Immanuel Kant の「自律」の考え方と相似しているのか、あるいは

一般意志に従うことで自分の欲望を捨てて人々が自分から社会と関係を持って社会の中で自分の能力を発揮することを旨とするソローを思わせる自由の概念をいうのかという問題がある。

フロムの大きなスパンは、「人類の歴史は個性化の成長の歴史で、また増大する自由の歴史」というところにあり、近代哲学思想において、カントやヘーゲルにとっては個人の自律と自由は彼らの思想体系の「中心的要請」であったにしてもそれは「個人を全能的な国家の目的」に従属させているもの（「～からの」消極的な意の自由）で、「フランス革命時代の哲学者」や「19世紀におけるフォイエルバッハ Ludwig Andreas Feuerbach, マルクス Karl Marx, スティルナー Max Stirner, ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche」のように「個人は自己の成長や幸福とは関係のないどのような目的にも従属してはならない」という考え（「～への」積極的な意の自由）を区別している<sup>47)</sup>。

ルソーのドイツ語版 *Der Gesellschaftsvertrag* (1769) のヴィーザーの文庫に収蔵された4版(1862)までの一世紀におけるそのドイツ及びオーストリアにおける伝播についての史料を知らないが、後年のヴィーザーの在職の最期に学位を授与されているハイエクが後年に著わした書アメリカ版(1956)の序にも自由 Liberty の言葉遣いに触れて、「私はリベラルという用語をその本来の意味、すなわち19世紀の意味で使っており、イギリスではなおこの意味で流布している。昨今のアメリカ人が用いる場合は、しばしばそれとほぼ反対に近いものを意味する」<sup>48)</sup>と注意を促している箇所があるものの思想史的は一考を要すると思う。

なお、野田弘英（東京経済大学名誉教授）ならびに香川崇（富山大学）両氏の目を煩わせています。厚く感謝します。

## 注：

- 1) Max Alter, *Carl Menger and the Origins of Austrian Economics*, Westview Press, Oxford, 1990. 8-9.
- 2) 桂木「近現代経済学形成に占めるオーストリア学派の役割と意義：F.v.Wieser Bibliothek 再整理作業から」『富大経済論集』56-2/3, 2013, 248-250
- 3) Alter, *ibid.*, 221
- 4) 桂木ほか, 前出, 247
- 5) Alter, *ibid.*, 195
- 6) Alter, *ibid.*, 221-222
- 7) Alter, *ibid.*, 222-223  
Wieser, *Maturliche Werth*, 1888., Frankfurt a. M., 1968. 大山千代雄訳『ヴィザア資源価値論』有斐閣1937, 以下, 大山訳1968によると, 本稿でこれから取り上げるように, ヴィーザーは「ゴッセンは *wearth des letzten Atoms* (最終分子の価値), ジュボンスは *terminal utility* (最終効用) 並びにワルラスは *intensité du dernierbesoin satisfait* (最後に満足される希少のもの) とあらわした」がメンガーでは必ずしも明示的でなかったところを彼は *Grenznutzen* (限界効用) と定義したのである (p.12, 14頁)。
- 8) Alter, *ibid.*, 223
- 9) Alter, *ibid.*, 224-225
- 10) Alter, *ibid.*, 224-225, Wieser, *ibid.*, p.25-6. *ibid.*, 32-33頁
- 11) Wieser, *ibid.*, p.18, 訳 *ibid.*, 22頁
- 12) Wieser, *ibid.*, 33-34, 37-38. 訳 *ibid.*, 40-41頁, 45-46頁)
- 13) Wieser, *ibid.*, 54-55. 訳 *ibid.*, 50頁)
- 14) Alter, *ibid.*, 226-227. Cf. Böhm-Bawerk, *Rechte und Verhältnisse vom Standpunkte der volkswirtschaftlichen Güterlehre, und Positive Theorie des Kapitals* Roscher, *Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland*, 1874
- 15) Menger, Carl, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 1961  
Carl Mengers erster Entwurf zu seinem Hauptwerk "Grundsätze", geschrieben als Anmerkungen zu den "Grundsätzen der Volkswirtschaftslehre" von Karl Heinrich Rau, Bibliothek der Hitotsubashi Universität, 1963. Duke大学にも同版
- 16) Kiichiro Yagi, in *Austrian economics in transition : from Carl Menger to Friedrich Hayek*, Harald Hagemann, Tamotsu Nishizawa and Yukihiko Ikeda, Palgrave Macmillan, 2010, 23-25.
- 17) Hack, Carl Menger, *Grundsätze der Volkswirtschaft, Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, 28, 1872, 184.
- 18) Kiichiro Yagi, *ibid.*, 24.
- 19) Kiichiro Yagi, *ibid.*, 26-7.
- 20) Alter, *ibid.*, 187, 200-202, 207
- 21) Yagi, *ibid.*, 27-29. なお, 八木訳では「機会」となっている。
- 22) Hayek, F.A., *Introduction to Principles of Economics by Carl Menger*, (Translated by

- James Dingwall & Bert F. Hoselitz), New York University Press, 1981, 17-18.
- 23) Hayek, F.A., *ibid.*, 18.
- 24) Hayek, F.A., *ibid.*, 19.
- 25) Hayek, F.A., *ibid.*, 19.
- 26) Menger, *Grundsätze, ibid.*, :Principles, *ibid.*, ch.3
- 27) <https://www.evernote.com/shard/s18/sh/5401ce73-d613-4aed-b267-00ecd2938ba398695c98d36e56a1e880866008fcf7f1>
- 28) その追証照合にはなお半年を要する。
- Léon Walras, “*Un économiste inconnu: Hermann-Henri Gossen*”, *Journal des économistes*, 4e série, avril-mai 1885, 30 pp. 68–90; as reprinted in WALRAS (1896, pp. 311–330).
- , *Etudes d'économie sociale: Théorie de la répartition de la richesse sociale*, édition comparée, in Auguste et Léon Walras, *OEuvres économiques complètes*, 9, Paris:Economica, 1896.
- 29) 御崎佳代子『ワルラスの経済思想』名古屋大学出版会, 1998, 60-61.
- 30) Walras, L, *Les associations populaires de consommation, de production et de credit*, 1966 in WALRAS (1990)
- 31) 御崎佳代子『同上』, 76-77. なお, ワルラスは, 価値の原因を「効用のあるものの希少性」に求めている。Walras, *Elements d'economie politique pure ou Theorie de la richesse sociale*, Paris et Lausanne, 1926 (『純粋経済学蠟論』(久武雅夫訳), 岩波書店, 1983) (180-184)。なお, 森嶋がワルラスにおけるマクロの均衡という理解で, それを静態的モデルで考えていたジャッフエを批判して成長モデルとしての均衡としたことにも関連してくるが, ワルラス「資本形成及び信用」理論(『粋経済学要論』第5章)の扱いである(御崎 *ibid.*, 113頁)。ここで扱われているのは「純貯蓄」と資本財形成という「進化する社会均衡」条件である。その資本形成という交換と生産の均衡にいたるには, すなわち「一定期間における貯蓄(預金)によって形成される新資本との均衡」が有効に成立する条件は何かということである(Wlras, 1988, 377, 久武訳281. 御崎115頁)。
- 32) Natural Value (Uebersetzung von 2. durch Prof. Smart). London 1893. 『自然価値論』大山千代雄訳, 有斐閣 1937, 110-113
- 33) メンガー文庫における彼による文献への注記的書込みについては以下のようにになっている。*Positive Theorie des Kapitaless / von Eugen v. Böhm-Bawerk*. Düsseldorf : Verlag Wirtschaft und Finanzen , 1991. - (Klassiker der Nationalökonomie).  
Der Streit um dem Kapitalischegreif (38-42pp)  
Kapital überhaupt nemen ... Einen begrieff von Produkten, die als Mittel den Guterarbeiten dienen ...  
Zu Erwebszwaken dienenden Produkt.  
*Rechte und Verhältnisse vom Standpunkte der volkswirtschaftlichen Güterlehre : kritische Studie / von Eugen v. Böhm-Bawerk*  
Innsbruck : Wagner'schen Universitäts-Buchhandlung , 1881.  
Weil neben der Aufzalung der Leistungen selbst pleonastisch ercheinen...

↑ als neben.....

*Zum Abschluss des Marxschen Systems* / von E.v. Böhm-Bawerk[Berlin] : [O. Haering] , [1896].

Quelle von Tauschwert zu Sein.

*Einige strittige Fragen der Capitaltheorie* / von E. Böhm-Bawerk[1], [2], [3]. - Wien ; Leipzig : W. Braumüller, [1899].

× × Zum phanomens ....

× × der enpalsche Eckstein meiner Capitaltheorir, Lexis Philippovich und Dietzel ist eine Gruppen von Bemerkungen anzutreffen ....

Zinstheorie eigentlich zu leisten hat ..... Dass die Capitalzinstheorie selbstverständlich den Capitalzins zu erklären hat, ist ein Truismus.

*Capital und Capitalzins* / von Eugen von Böhm-Bawerk, 2.Aufl. - Innsbruck : Wagner'schen Universitäts-Büchh., 1900-1902.

(序文への×多)

Kritik des Mengerschen Mutzunge begriffes

Ist offenbar indem Capitalswert der Sache, selbst inbegriffen

34) 「現代経済学形成に占めるオーストリア学派の役割と意義 : F.v.Wieser Bibliothek 再整理作業から」『富大経済論集』58-2/3, 2013.251-254

35) *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Leipzig, 1912.

36) ウィーン大学において法学博士の学位を得た学位論文は「ローマ法と教会法 (1906)」で、ドロッカーが触れているのは、本文庫収蔵の前稿に挙げたNo.0080並びにNo.0217がある。No.0080 Eine "dynamische" Theorie des Kapitalzinses, *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*, Wien, 1908.

No.0217 Das Rentenprinzip in der Verteilungslehre, *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im deutschen Reiche*, Leipzig, 1907. 併設: 一橋古典 Mengar ほか

37) Drucker, Peter F., *Adventures of a Bystander*, Harper & Row, 1779, 50-51, 60-6. 邦訳: 『ドロッカーわが軌跡 知の巨人秘められた交流』, ダイアモンド社, 53-55.

38) Drucker, *The Ecological Vision: Reflections on the American Condition*, 1993, 邦訳: 『すでに起こった未来』, ダイアモンド社, 1994, 73-4

39) Drucker, *ibid.*, 邦訳: 『すでに起こった未来』, ダイアモンド社, 1994, 74-5

40) Drucker, *ibid.*, 邦訳: *ibid.*, 75.

41) Drucker, *ibid.*, 邦訳: *ibid.*, 88-89.

42) Austrian economics in transition: from Carl Menger to Friedrich Hayek, Harald Hagemann, Tamotsu Nishizawa and Yukihiko Ikeda, Palgrave Macmillan, 2010, 3-7.

43) 桂木.2013, 263

44) Ikeda, *ibid.*, 9-11

45) Ikeda, *ibid.*, 11-14.

46) From, *Escape from Freedom*, 1941 『自由からの逃走』 日高六郎訳, 1951, 東京創元社, 203-243, 260.



- 47) From, *Escape from Freedom*, 1941 『自由からの逃走』 日高六郎訳, 1951, 東京創元社, 203-243, 260
- 48) Hayek, *The Road to Serfdom*, London:George Routledge & Sons, 1944, 1956『隷従への道: 全体主義と自由』 一谷一郎・一谷映理子訳, 1992, 東京創元社, xv

提出年月日：2013年9月10日

「フリードリッヒ・フォン・ヴィーザーの貨幣と価値・価格論をめぐる  
文庫収録文献」

正誤表

頁	行	誤	正
168(320)	10	看過さなかった <sup>16)</sup> 。	看過しなかった <sup>16)</sup> 。
178(330)	3	前稿2)	前稿 <sup>2)</sup>
181(333)	7	桂木ほか	桂木

『富山大学紀要.富大経済論集』第59巻第2号(2013年11月)